

# 「烏丸鮮卑東夷伝の考古学」第4回

## 東夷伝（2）東沃沮



I はじめに

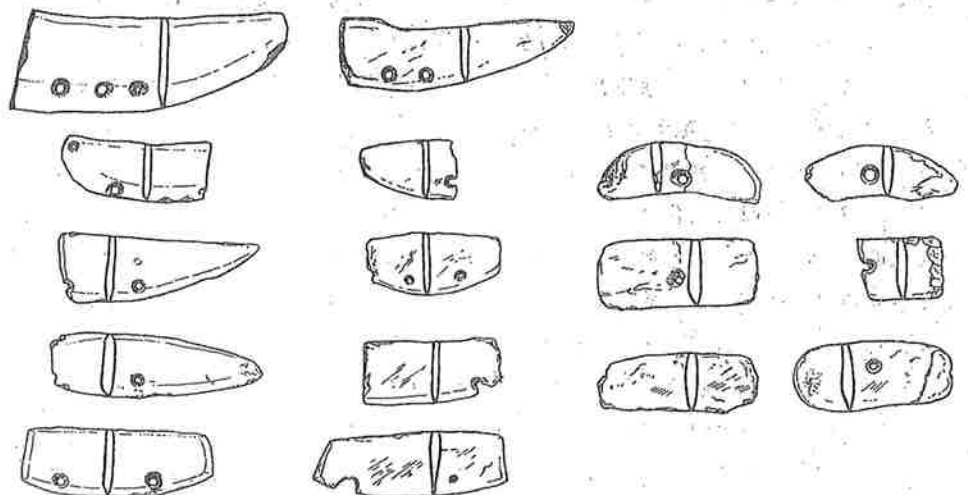
II 東沃沮伝を読む

III 東沃沮伝の考古学的アプローチ

姜仁旭ほか、2008『考古学からみた沃沮文化』東北亜歴史財団

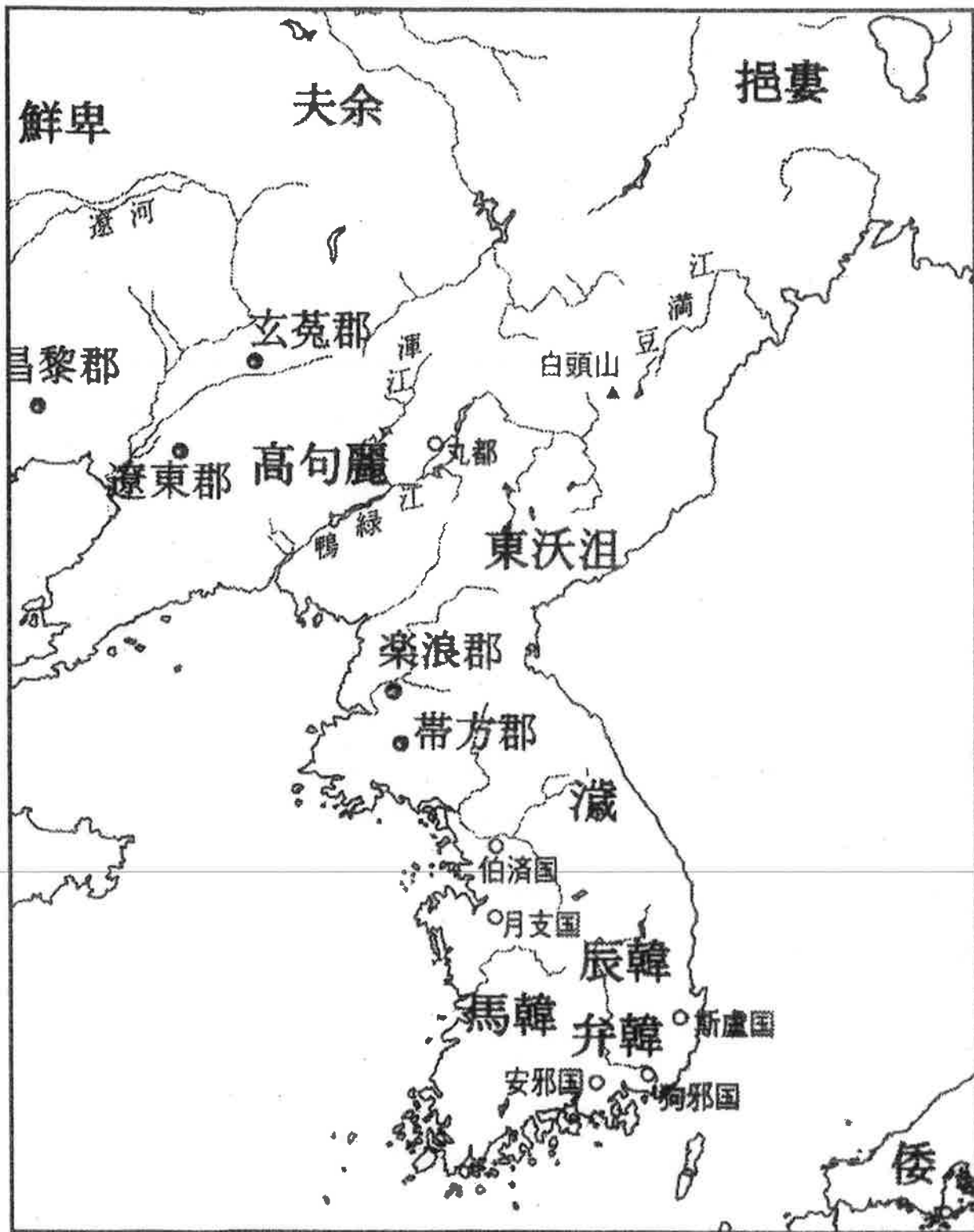
IV おわりに

今後の課題



东康组与团结组石刀的对比

左起第一列：东康出土；左起第二列：东升(1~3)、大牡丹(4~5)出土；  
右起第一列：团结出土；右起第二列：大城子出土。



3世紀の東北アジア（『魏志』東夷伝にみえる諸国・諸民族）

田中俊明, 2014 「三世紀東北アジアの国際関係」『朝鮮学報』第230輯

か。」老人がいった、「この国の者がむかし船に乗って魚を捕っていて、暴風にあい、数十日も吹き流され、東方のある島に漂着したことがあります。その島には人がいましたが、言葉は通じません。その地の風俗では、毎年七月に童女を選んで海に沈めます。」また次のようにもいった、「海中には、ほかに女ばかりで男のいない国があります。」次のようにも述べた、「二枚の布製の着物が海から漂いついたことがあります。その着物の身ごろは普通の人の着物と変わりませんが、両袖は三丈もの長さがありました。また難破船が波にながされ海岸に漂い着いたことがあり、その船には項うなじの所にもう一つの顔のある人間がいて、生けどりにされました。しかし話しかけても言葉が通ぜず、食物を取らぬまま死にました。」こうした者たちのいる場所は、みな沃沮の東方の大海の中にあるのである。

(20) 平安南道大同江面貞柏里の、前漢から後漢にかけての時期に比定される墓の中から「夫租蕨君」の銘のある銅印が出土している。この夫租が沃沮に、蕨わいばくが濊貊の字にあたると考えられている。

(21) 四郡とは、真番・臨屯・楽浪・玄菟の四つである。なお漢の武帝の朝鮮への出兵については、『史記』朝鮮列伝を参照。

(22) 嶺東七県とは、東暭・不而(不耐)・蚕台・華麗・耶頭昧・前莫・夫租(沃沮)の七つ。

(23) 三老は、漢代にそれぞれの郷から選ばれてその地方の教化に当たった長老。中央集権的な政治体制の中にあつて、共同体的原理にのつた特殊な官。それゆえ民衆たちも親しみやすかつたのであろう。赤眉の反乱軍も三老の官を用いている。

(24) 鬲かひに粥を入れてぶら下げて魂のよりしろとすること、中国の葬礼でも行なわれ、中国ではそれを「重」と呼ぶ。『儀礼』ぎらい士喪礼を参照。

おいて入口とする。死者が出るとみな一度仮りの埋葬を行ない、屍体がやっと隠れる程度に土をかけて、皮や肉が腐ってしまってから、骨をひろい集めて槨の中に収める。一つの家族の骨はみな同じ槨に収められ、木を削って生前の姿を摸し、死者の数だけその像をならべる。また土製の隔れき(三足のうつわ)の中に米を入れ、ひもでしばって槨の入口のあたりにぶら下げ(24)る。

〔一〕『魏略』にいう。彼らの婚姻の方法は、娘が十歳になると、もう婚約を行ない、婿の家が迎えとって養い、成長したあと婦つまとする。成人すると、もう一度女の家にかえされ、女の家の方から結納金を求め、結納金が完全に支払われると、ふたたび婿のもとにかえされる。

毋丘儉かんきゆうけんが句麗を討伐すると、句麗王の位宮いきゆうが沃沮に逃げこんだので、さらに沃沮の地にまで軍を進めて攻撃をかけた。沃沮の邑落をすべて打ち破り、首級を挙げ捕虜にした者が三千余にのぼった。宮は北沃沮に逃げこんだ。北沃沮は、置溝婁ちこうろうとも呼ばれ、南沃沮から八百余里の距離にある。その風俗は南と北とで異なる所なく、挹婁ゆうろうと境を接している。挹婁が船を使って盛んに侵入略奪を行なうので、北沃沮はこれを畏おそれて、夏の期間はいつもけわしい山の深い洞窟の中で守りを固め、冬に氷が張って、船の通行ができなくなると、山を下って村落に居住する。王頎おうきは、毋丘儉の命令を受けて本隊から別れて宮を追いかけ、北沃沮の東方の境界までゆきついた。その地の老人に尋ねた、「この海の東にも人間は住んでいるだろう

れである。沃沮は「玄菟郡治がうつるとともに」かわって楽浪郡に属することになった。漢の朝廷では、その土地が広く遠くまで及ぶことから、単单大嶺の東側の部分に楽浪東部都尉を置き、不耐城を役所として、分けて嶺東の七県を治めさせた。<sup>(22)</sup>このとき沃沮もみなその属県となった。漢の建武六年（三〇）、国境地帯の郡が整理されたとき、東部都尉もこれを機に廃止された。それ以後は、それぞれの県のうちのおもだった首領が県侯となり、不耐・華麗・沃沮の諸県はみな侯国となった。異民族たちの互いの争いの中で、「他の侯国は滅びたが」ただ不耐の濊侯だけは現在も功曹や主簿などの官僚機構を置いている。濊族のものたちがみなそうした官についているのである。沃沮の邑落の酋長たちが、みな三老と名のっているのは、もとの「漢の支配下に行なわれた」県国の制度にのっとったものである。<sup>(23)</sup>

「東沃沮は」国は小さく、大国の間であって庄迫をうけ、けっきょくは句麗に臣としてつかえることになった。句麗はもとどおりその中の大人に使者の官を与えてその地の統治にあたらせ、また大加に命じて租税の徴収、貂布（貂布）や魚や塩や食用の海産物の献上をいっさいうけおわせ、千里もの距離をかついで句麗まで運んでこさせることとした。またその地の美女を送らせて妾婢となし、奴婢や下僕のように扱った。

その土地は肥沃で、山を背にして海に向って開け、五穀がよく成長し、農耕に適している。人々の性格は質朴で飾り気がなく勇敢であって、牛や馬が少ないところから、矛を持って徒歩で戦うことを得意としている。飲食物や住居、衣服や礼儀には、句麗と似た点がある。<sup>(24)</sup>葬儀にあたっては、大きな木製の槨（墓室）を作る。その長さは十余丈もあり、一方を開けて

毋丘儉討句麗，句麗王宮奔沃沮，遂進師擊之。沃沮邑落皆破之，斬獲首虜三千餘級，

宮奔北沃沮。北沃沮一名置溝婁，去南沃沮八百餘里，其俗南北皆同，與挹婁接。挹婁喜

乘船寇鈔，北沃沮畏之，夏月恆在山巖深穴中爲守備，冬月冰凍，船道不通，乃下居村落。

王頎別遣追討宮，盡其東界。問其耆老「海東復有人不？」耆老言國人嘗乘船捕魚，遭風見

吹數十日，東得一島，上有人，言語不相曉，其俗常以七月取童女沈海。又言有一國亦在海

中，純女無男。又說得一布衣，從海中浮出，其身如中（國）人衣，其兩袖長三丈。又得一破

船，隨波出在海岸邊，有一人項中復有面，生得之，與語不相通，不食而死。其域皆在沃沮

東大海中。

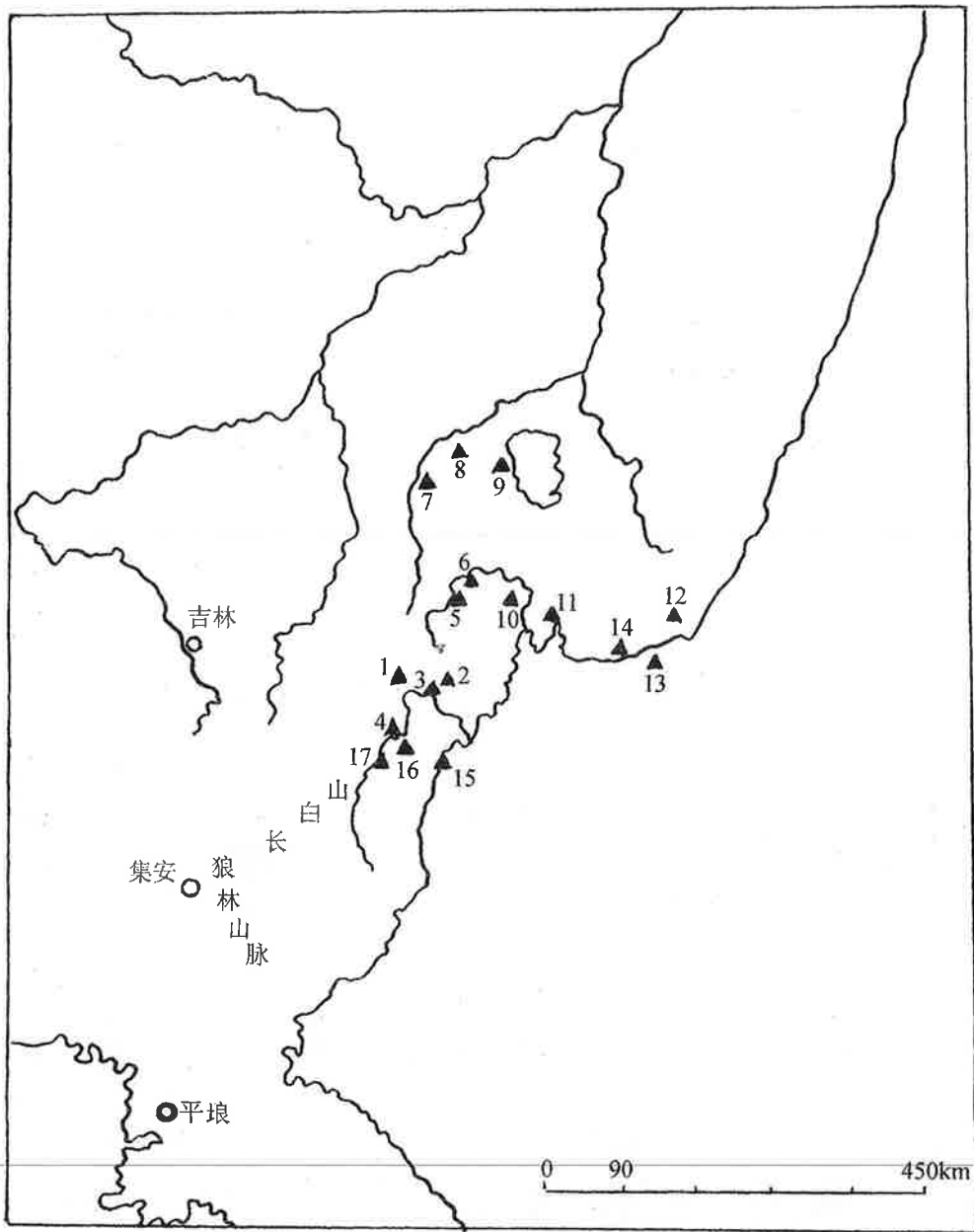
東沃沮<sup>(20)</sup>は、高句麗の蓋馬大山の東がわにいて、大海の岸边に住居を定めている。その地形は、東北がせばまり、西南にひらけて、千里ばかりに及び、北は挹婁・夫余と、南は濊貊と境を接している。五千戸があつて、統一的な主君はなく、代々邑落ごとにそれぞれ首領がいた。その言葉は句麗とほとんど同じで、時に小さな違いがあるだけである。

漢代のはじめ、燕から逃亡した衛満が朝鮮に国を立てて王となると、沃沮のものたちはみなその支配下に入った。漢の武帝は、元封二年（前一〇九）に朝鮮を伐ち、衛満の孫の右渠を殺すと、その土地を分けて四つの郡を置き、沃沮城に玄菟郡の役所を置いた。のちに夷貊の侵入を受け、郡の役所は句麗の西北に移された。現在、玄菟の故府と呼ばれているのがそ

東沃沮在高句麗蓋馬大山之東，濱大海而居。其地形東北狹，西南長，可千里，北與挹婁、夫餘，南與濊貊接。戶五千，無大君王，世世邑落，各有長帥。其言語與句麗大同，時時小異。漢初，燕亡人衛滿王朝鮮，時沃沮皆屬焉。漢武帝元封二年，伐朝鮮，殺滿孫右渠，分其地爲四郡，以沃沮城爲玄菟郡。後爲夷貊所侵，徙郡句麗西北，今所謂玄菟故府是也。沃沮還屬樂浪。漢以土地廣遠，在單于大領之東，分置東部都尉，治不耐城，別主領東七縣，時沃沮亦皆爲縣。漢（光）〔建〕武六年，省邊郡，都尉由此罷。其後皆以其縣中渠帥爲縣侯，不耐、華麗、沃沮諸縣皆爲侯國。夷狄更相攻伐，唯不耐濊侯至今猶置功曹、主簿諸曹，皆濊民作之。沃沮諸邑落渠帥，皆自稱三老，則故縣國之制也。國小，迫于大國之間，遂臣屬句麗。句麗復置其中大人爲使者，使相主領，又使大加統責其租稅，貊布、魚、鹽、海中食物，千里擔負致之，又送其美女以爲婢妾，遇之如奴僕。

其土地肥美，背山向海，宜五穀，善田種。人性質直彊勇，少牛馬，便持矛步戰。食飲居處，衣服禮節，有似句麗。〔一〕其葬作大木槨，長十餘丈，開一頭作戶。新死者皆假埋之，才使覆形，皮肉盡，乃取骨置槨中。舉家皆共一槨，刻木如生形，隨死者爲數。又有瓦甕，置米其中，編縣之於槨戶邊。

〔一〕魏略曰：其嫁娶之法，女年十歲，已相設許。婿家迎之，長養以爲婦。至成人，更還女家。女家責錢，錢畢，乃復還婿。



团结—克罗乌诺夫卡文化分布示意图

1. 汪清新安间 2. 珲春—松亭 3. 珲春镇内 4. 延吉大苏 5. 东宁团结  
 6. 东宁大城子 7. 穆棱小四方山 8. 鸡东保安 9. 谢米皮亚特纳雅谷  
 10. 克罗乌诺夫卡(夹皮沟) 11. 奥列尼 I 12. 索科里奇 13. 彼得罗娃岛  
 14. 布洛奇卡岗 15. 罗津草岛 16. 会宁五洞 17. 茂山虎谷洞

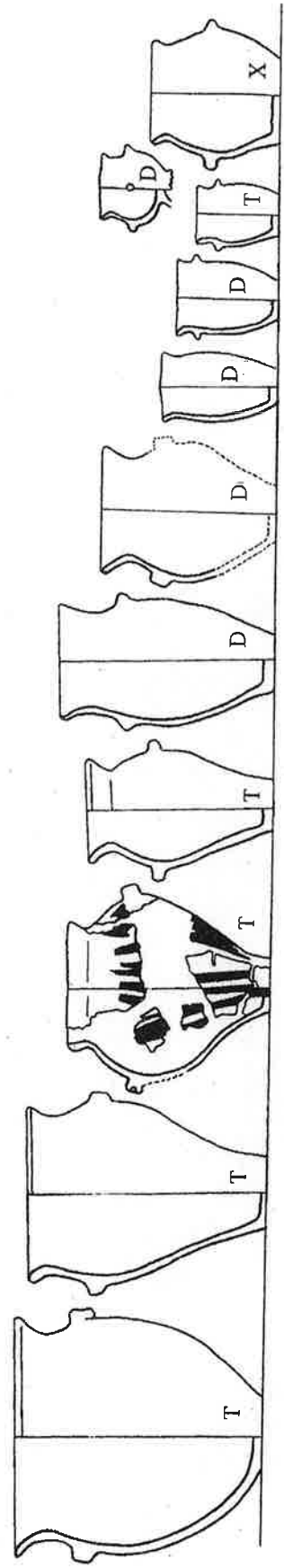
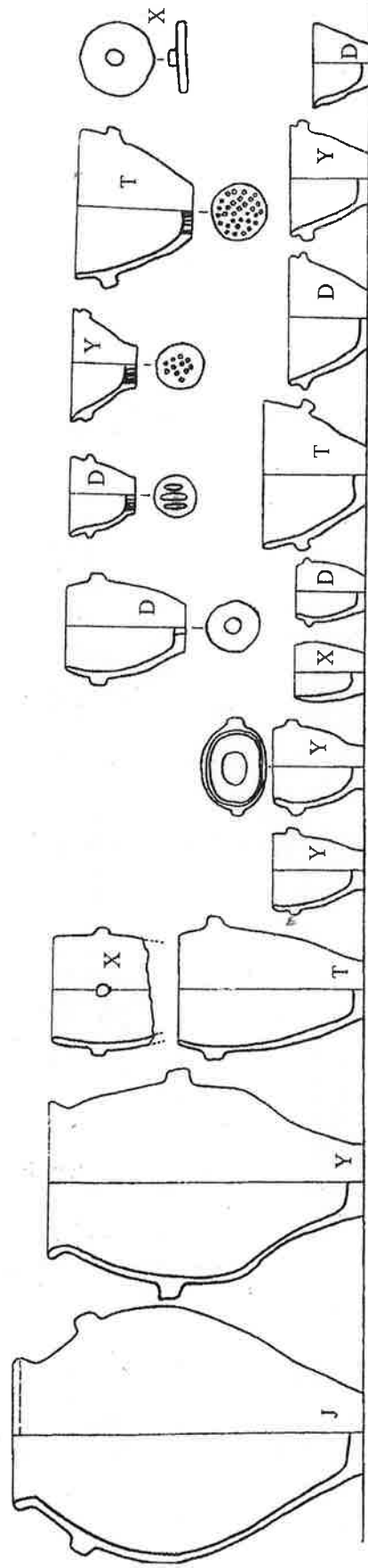
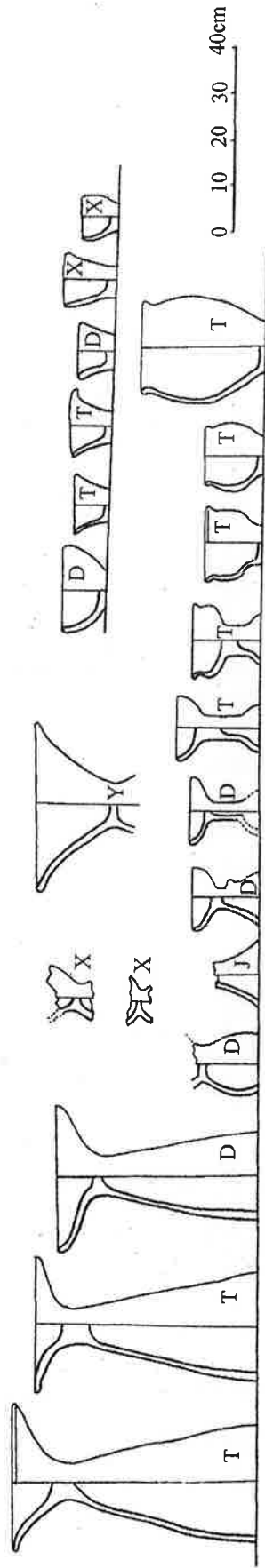
该文化的碳十四年代数据已测定了6个：

- |               |               |
|---------------|---------------|
| 团结下层 F5(门道踏板) | 公元前 420 ± 105 |
| 大苏第二层居住址(木炭)  | 公元前 340 ± 80  |
| 大城子 F2(房木)    | 公元前 205 ± 100 |
| 团结下层 F6(木炭)   | 公元前 150 ± 100 |
| 团结下层 F9(木炭)   | 公元前 110 ± 105 |
| 团结下层 F1(木炭)   | 公元 65 ± 85    |

在团结下层发现的西汉五铢钱，也是一个重要的年代证据。

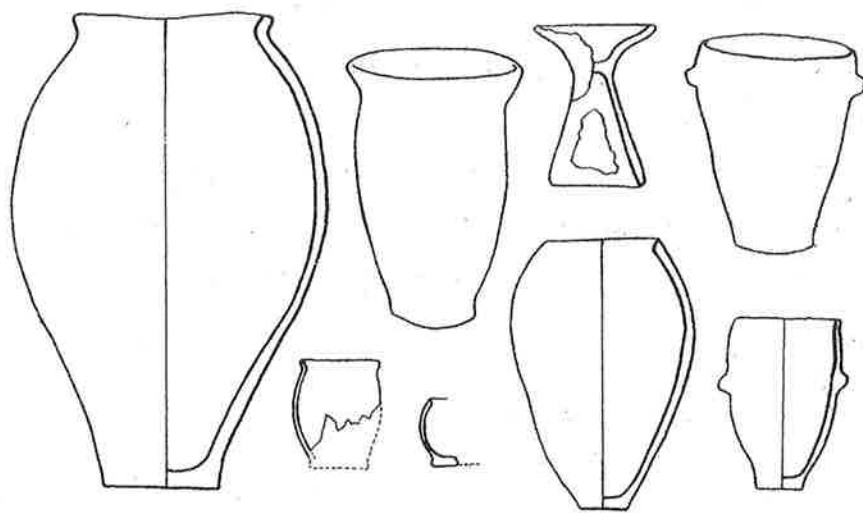
林沅，1985「论团结文化」『北方文物』创刊号



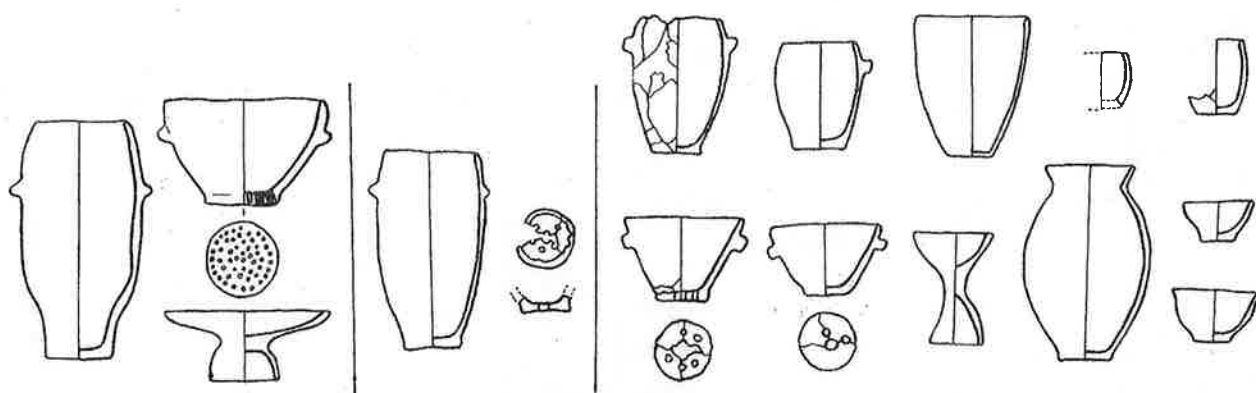


团结文化陶器群

(T. 团结下层 D. 大城子 X. 新安间上层 J. 琿春教师进修学院 Y. 一松亭)

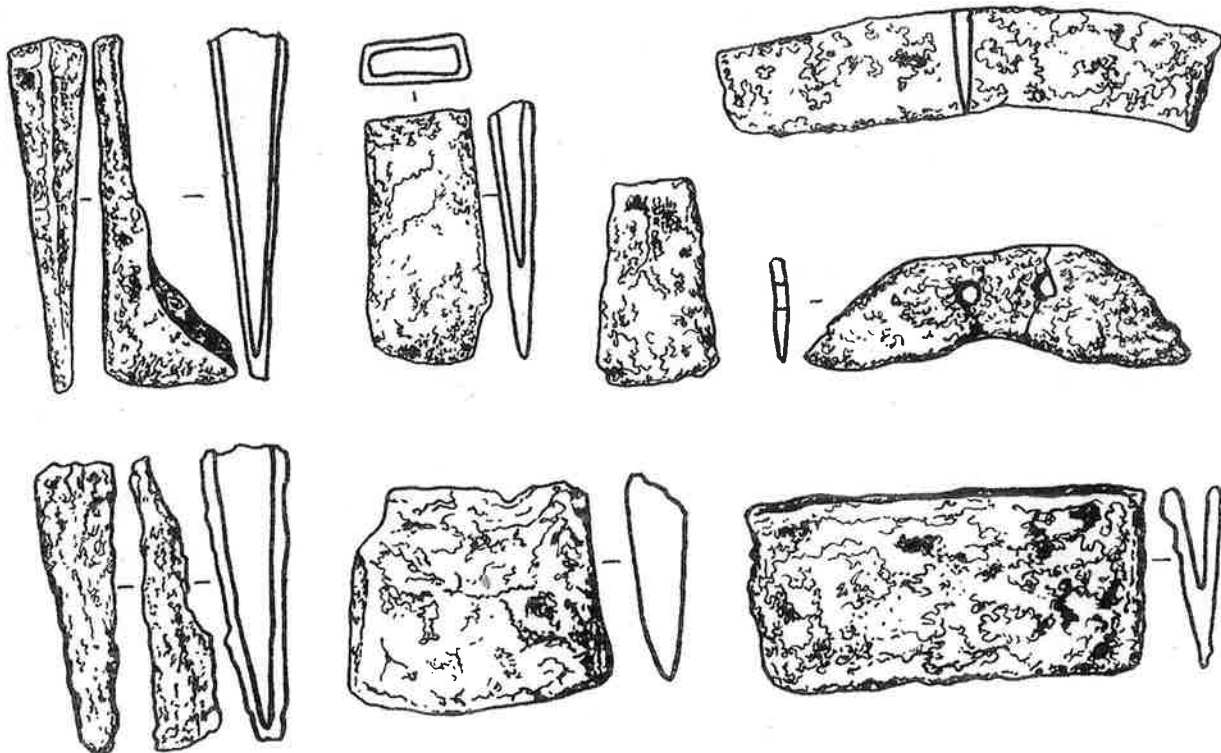


クロウノフカ  
克罗乌诺夫卡文化陶器举例



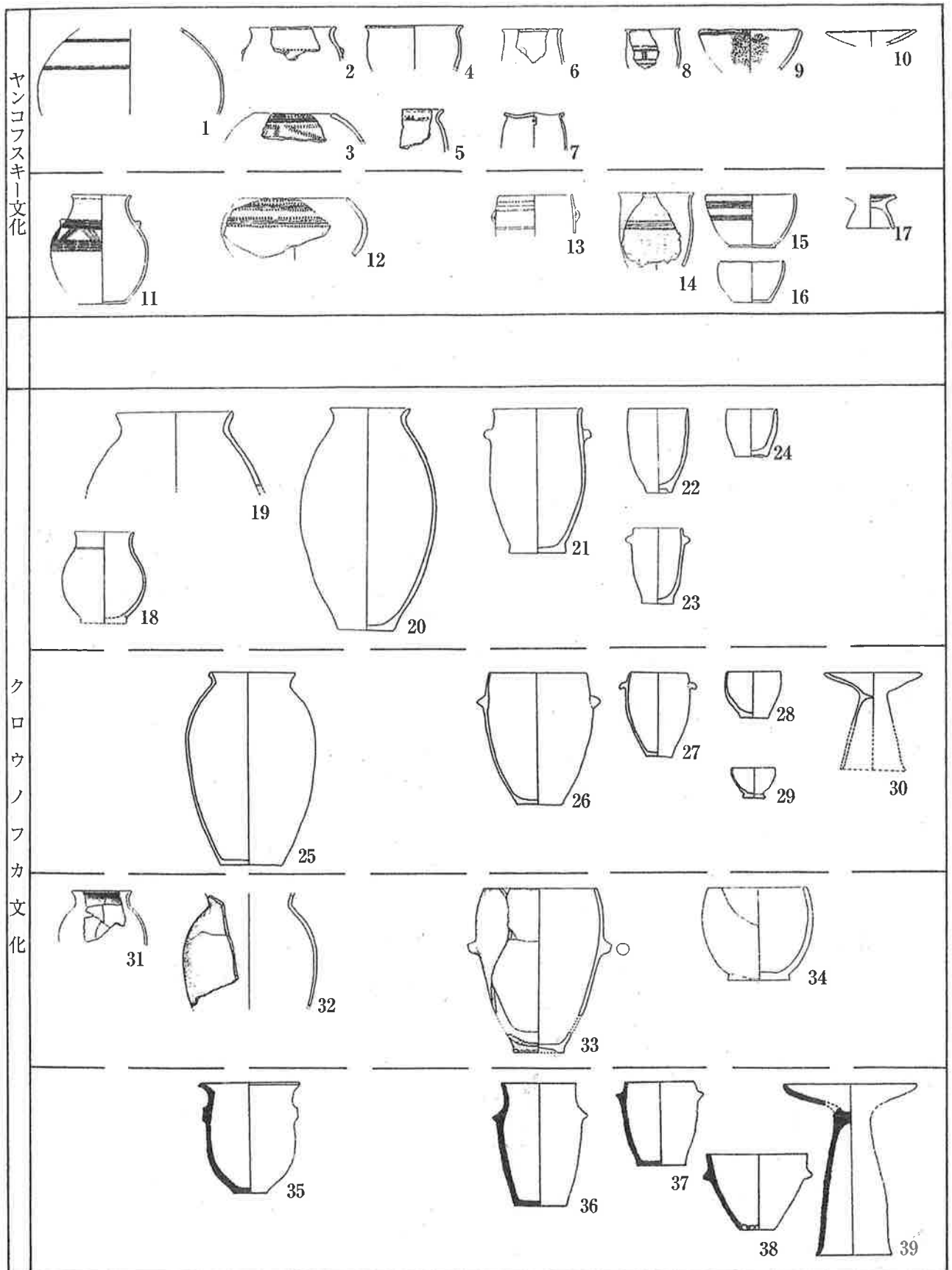
朝鲜发现的团结文化遗址陶器举例

(左：草岛出土 中：五洞出土 右：虎谷洞出土)



虎谷洞六期的铁器

林法, 1985 「论团结文化」 『北方文物』 创刊号



ヤンコフスキー文化とクロウノフカ文化の土器変遷

(1~10: クラーク5, 11~17: シルク岬, 18~24: クロウノフカ3号住居, 25~30: 1957・1968クロウノフカ1, 31~34: プロチカ15-ナ号住居, 35~39: 団結下層1号住居, 縮尺25~30・35~39を除いて1/14)

宮本一夫, 2009 「考古学から見た夫余と沃沮」 『国立歴史民俗博物館研究報告』 第151集

Excavation Areas  
in 1984

2号住居

3号住居

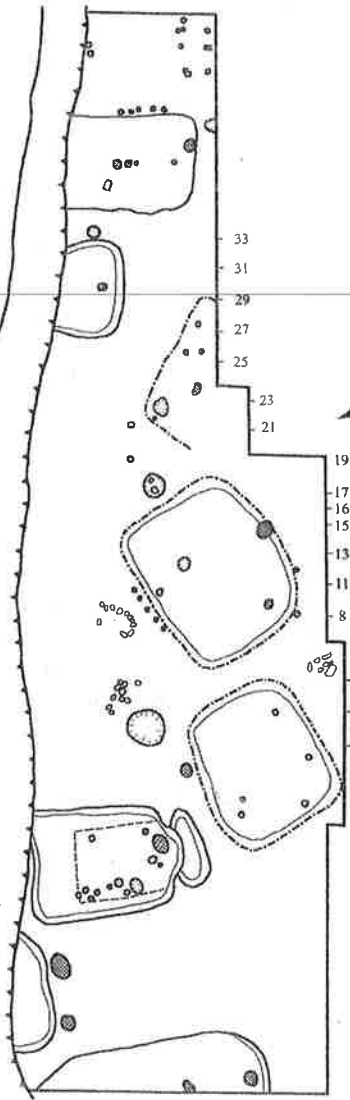
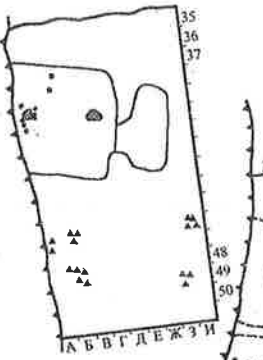
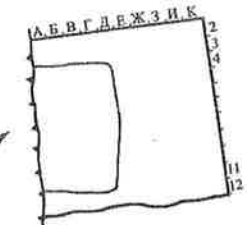
Excavation Area  
in 2002 and 2003

Excavation Area in 1957 and 1968  
(Бродянский Д.Л.1996:128)



Кроуновка River

7号住居



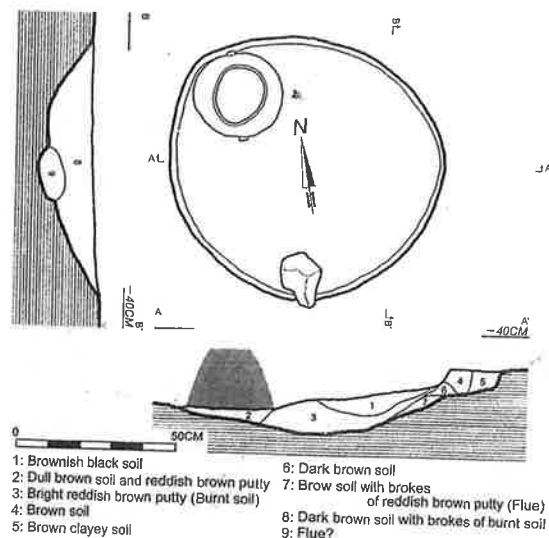
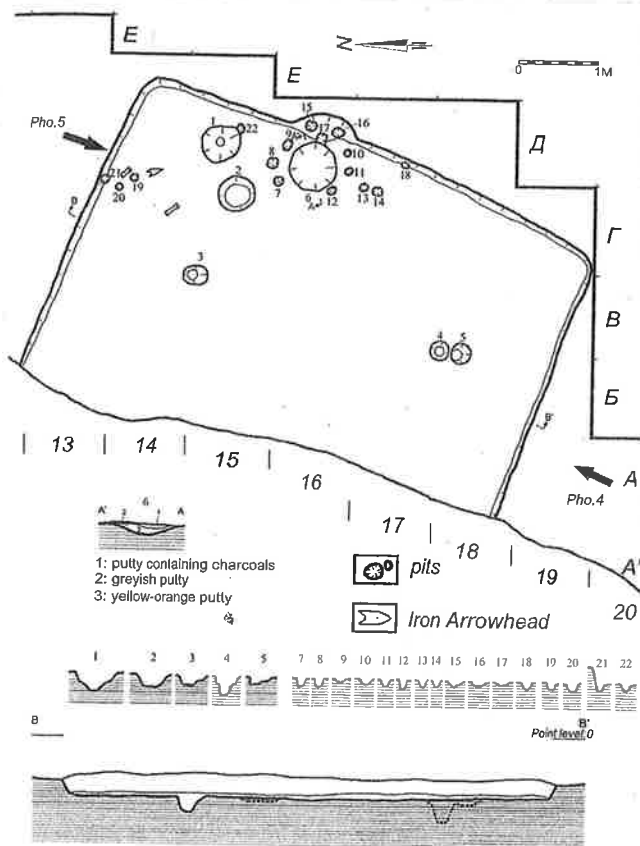
-  terrace edge
-  Neolithic dwelling
-  ceramic fragments
-  Yankovsky culture dwelling
-  Krounovsky culture dwelling
-  fireplace
-  stones
-  pits

クロウノフカ1遺跡における住居址の分布



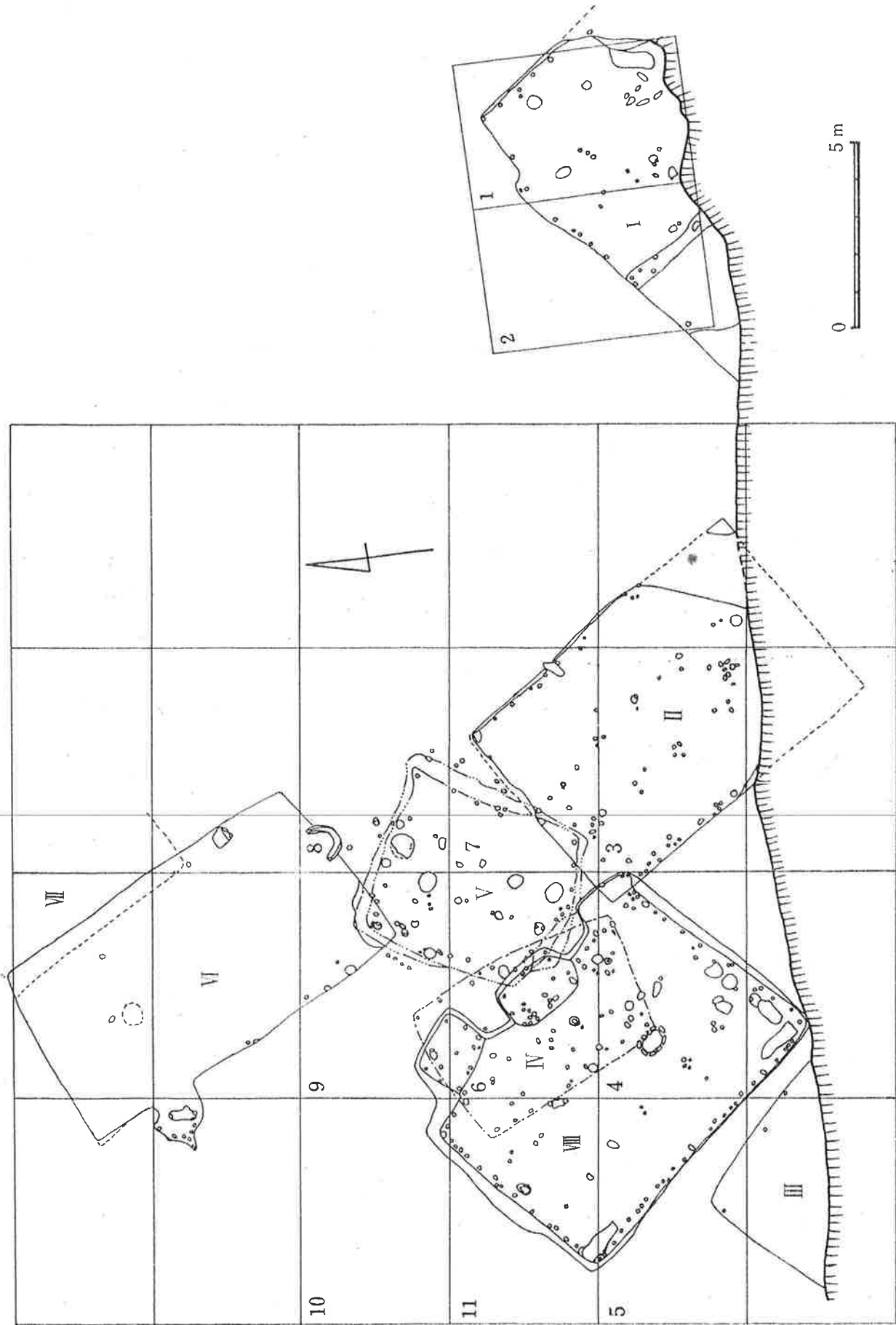
トンネル形炉址の分布

(1クロナノフカ, 2団結, 3アレニー-A, 4プロチカ, 5キエフカ, 6ベトロフ島, 7松坪洞, 8老河深, 9イヴォルガ, 10土城里, 11魯南里, 12細竹里, 13蓮花堡, 14西屯洞, 15漢沙里, 16大城里, 17栗文里, 18柯坪里, 19府院洞, 20勒島)



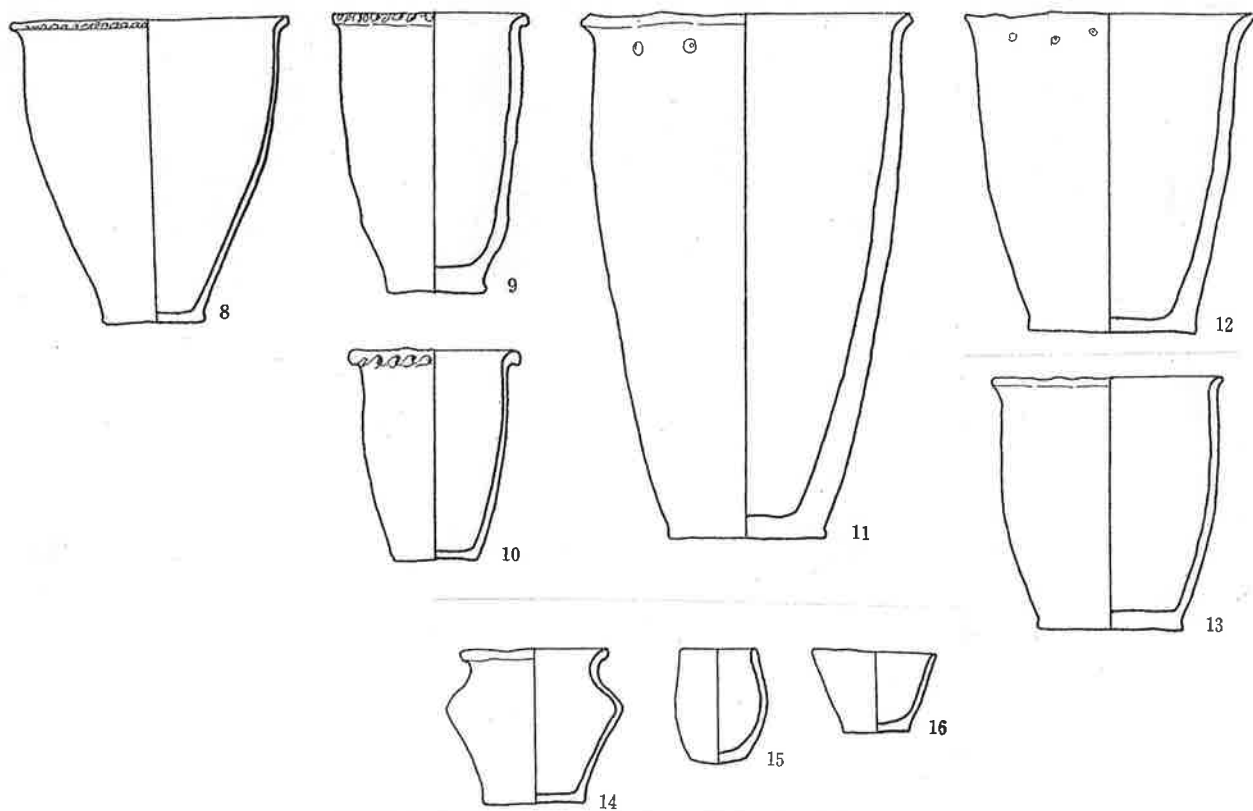
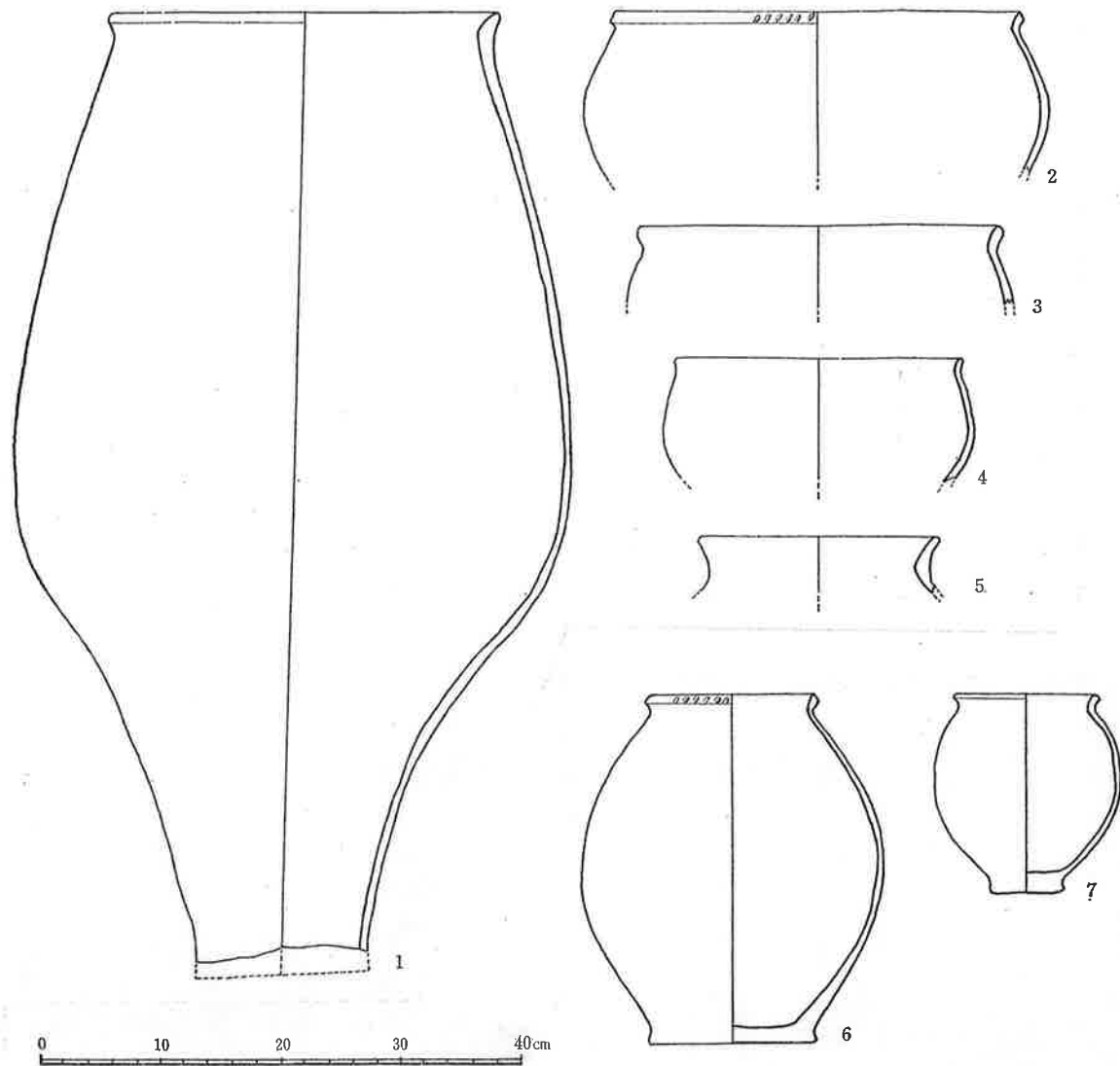
- 1: Brownish black soil
- 2: Dull brown soil and reddish brown putty
- 3: Bright reddish brown putty (Burnt soil)
- 4: Brown soil
- 5: Brown clayey soil
- 6: Dark brown soil
- 7: Brow soil with brokes of reddish brown putty (Flue)
- 8: Dark brown soil with brokes of burnt soil
- 9: Flue?

クロナノフカ1遺跡2002年発掘3号住居



発掘区と住居跡の配置

西谷 正, 1975 「会寧五洞の土器をめぐる問題—北部朝鮮無文土器  
 編年のために—」『史淵』第112号, 九州大学文学部

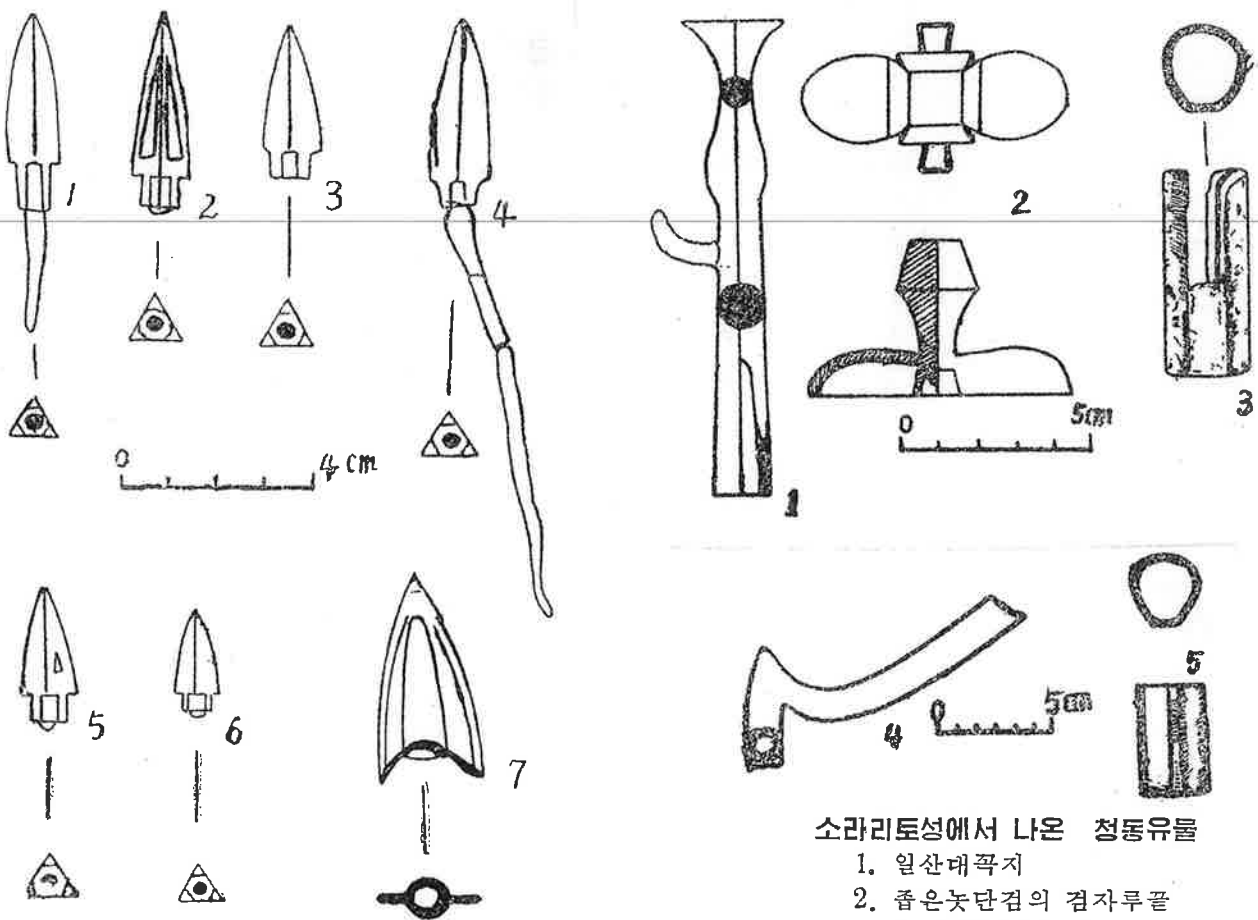


第 IV 号住居跡出土無文土器

## 소라리유적

유적은 영흥군 룡강리에 있다. 룡강리는 영흥읍에서 동남으로 약 6km지점에 있으며 룡강하류 오른쪽에 위치하고 있다. 이곳은 강하류지역에 펼쳐진 넓은 영흥평야의 대략 한복판에 위치하며 유적은 강변에 잇닿은 작은 언덕우에 자리잡고 있다. 언덕을 중심으로 하여 그 주변에는 토성이 있는데 토성안에는 노끈무늬기와와 질그릇 조각이 많다. 토성에서 1km 떨어진 곳에는 귀틀무덤 2기가 있다. 또 토성이 있는 언덕우는 원시유물포함지로 알려졌으며 발굴에 의하여 집자리로 판명되었다. 토성안에서 유적유물이 나온 정형을 보면 다음과 같다.

유물은 8호구덩이에서 가장 많이 나왔는데 유물포함층은 그 이전에 이루어진 원시유적층을 뚫고 그 아래로 뻗어있었다. 대략 너비 3m, 길이 5.6m 정도의 장방형구획안에 지표로부터 1m되는 부위에서 시작하여 2m 깊이에 이르기까지의 지층에서 유물이 나왔는데 교란이 심하여 층위관계가 뚜렷하지 못하였다. 드러난 유물은 청동활촉, 좁은놋단검의 검자루끝, 수레부속, 날부분의 너비가 주머니부분의 너비보다 좁은 쇠도끼 등과 쇠창끝, 쇠단검 조각, 쇠갈구리, 날부분이 주머니부분보다 넓어진 쇠도끼, 말자갈, 쇠뇌부속 등이다.



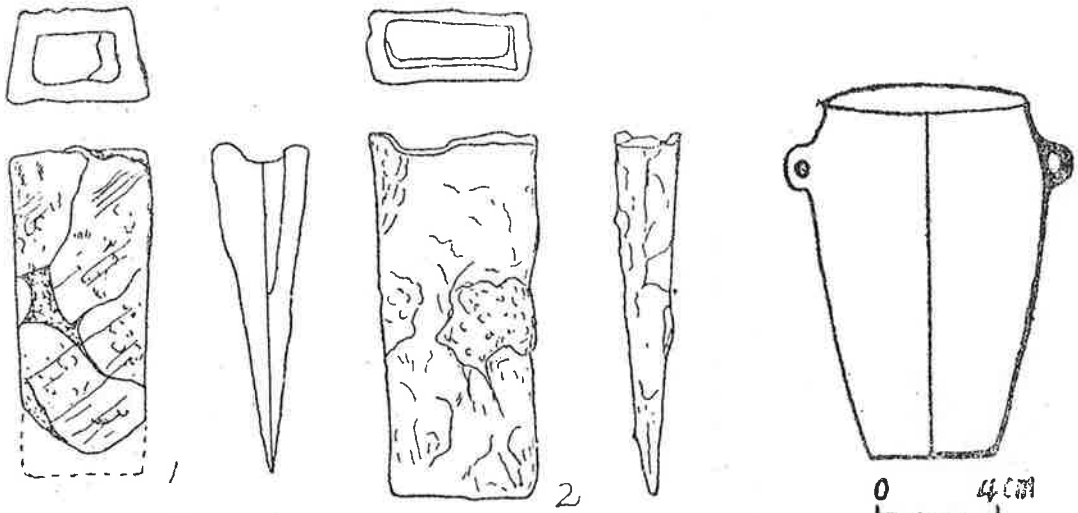
소라리토성에서 나온 청동활촉

소라리토성에서 나온 청동유물

1. 일산대쪽지
2. 좁은놋단검의 검자루끝
- 3, 5. 창고다리(?)
4. 을자형동기

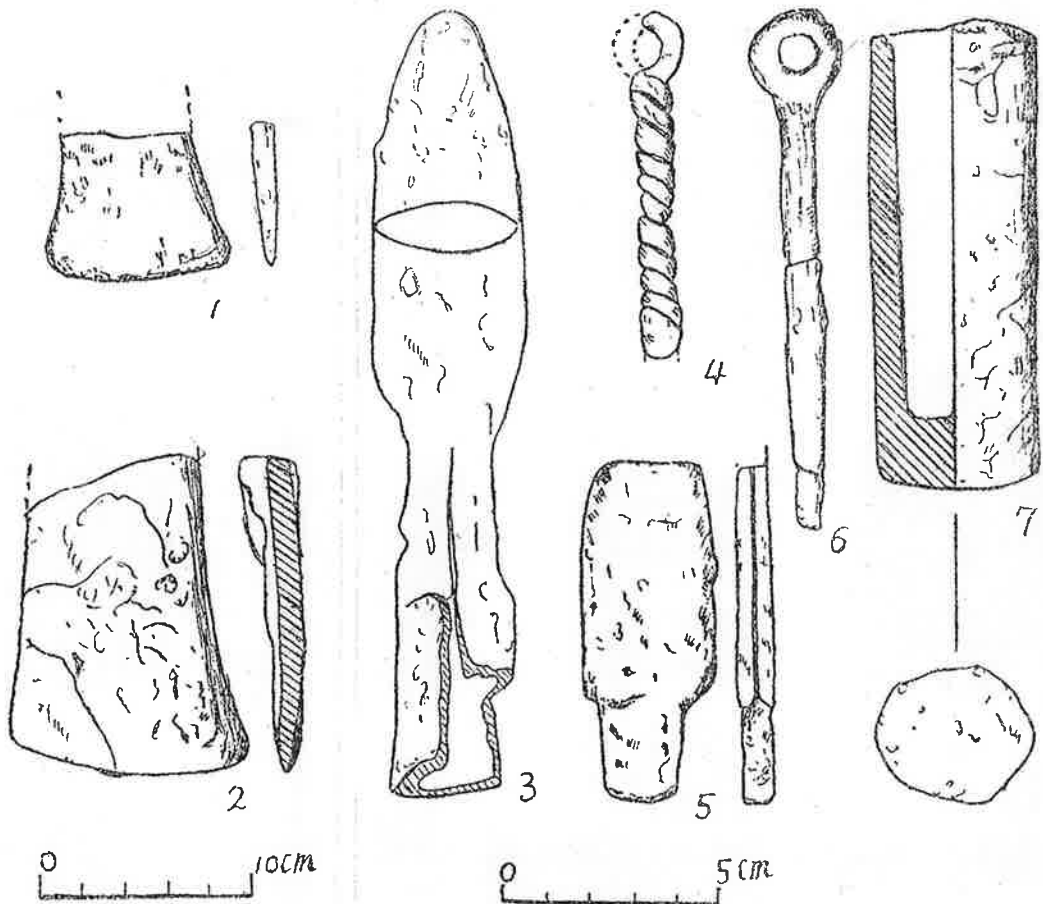
117·477, 1974 「咸鏡南道一帶의 古代 遺跡 調査報告」 『考古學資料集』 第4集, 社会科学出版社





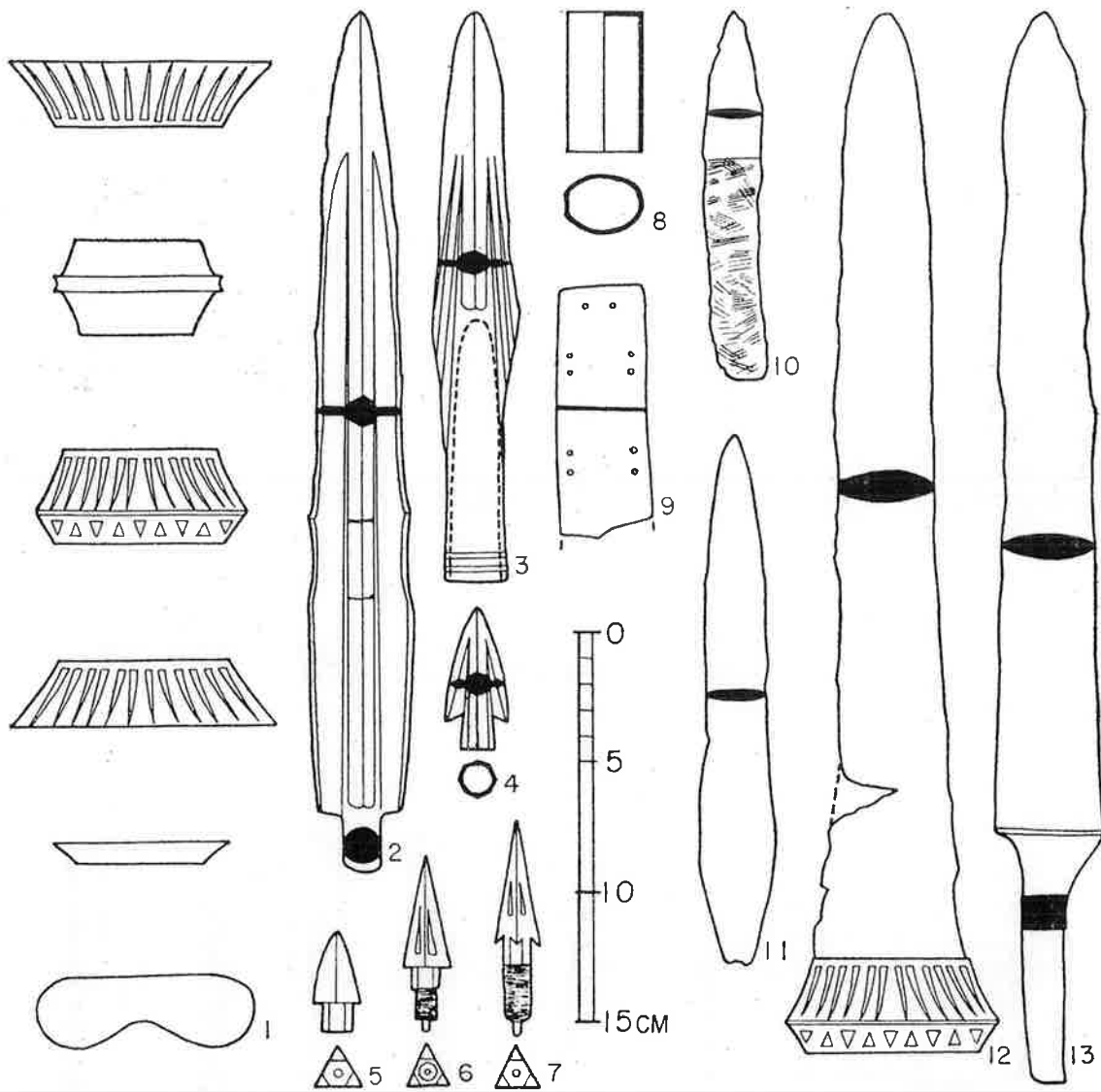
소라리토성에서 나온 제1식의 쇠도끼

소라리토성에서 나온 두귀달린 청동단지



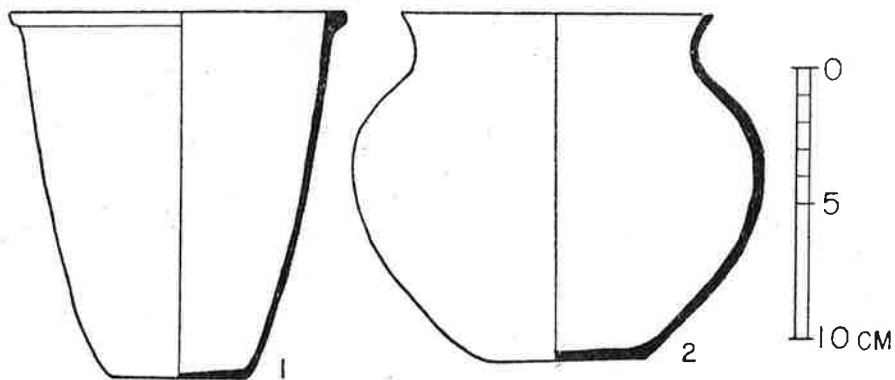
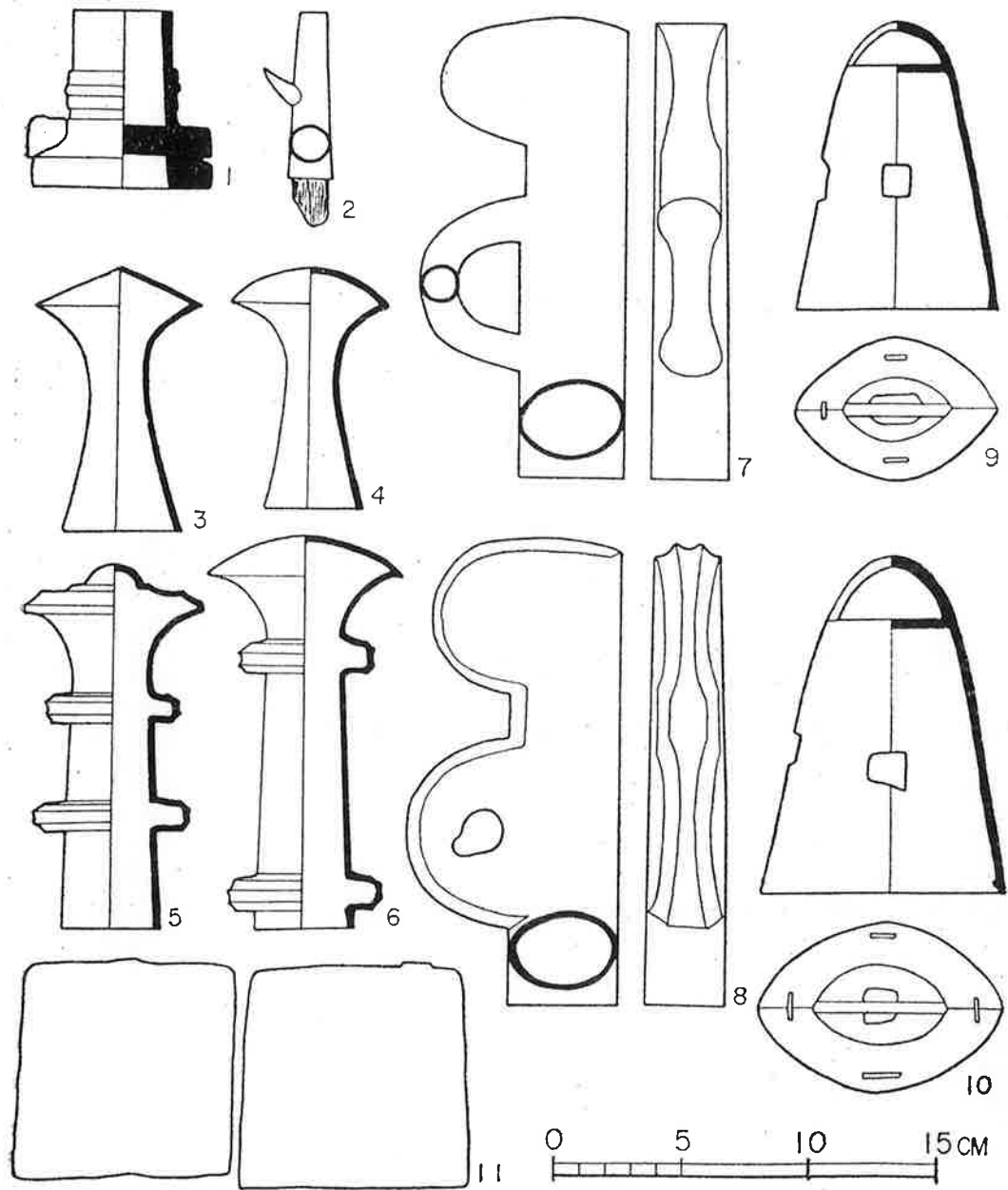
소라리토성에서 나온 쇠로 만든 유물

- 1, 2. 쇠도끼조각      3. 쇠창끝      4. 자갈  
5. 쇠단검      6. 쇠손칼      7. 창고다리



夫租巖君印章 (左) と平壤出土封泥各種 (右)

韓国考古学会 (庄田慎矢・山本孝文 訳), 2013 『概説 韓国考古学』  
同成社



李淳鎮 (永島暉臣・西谷 正 共記), 1978 「『夫相藏君』墓について」  
『考古学研究』第14卷第4号, 考古学研究会

